

令和元年6月3日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02829

研究課題名(和文) 日本語教育における反転授業の効果検証と反転授業モデルの構築

研究課題名(英文) The verification of the effectiveness and building the model of flipped learning for Japanese language education

研究代表者

古川 智樹 (FURUKAWA, Tomoki)

関西大学・国際部・准教授

研究者番号：60614617

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は未だ研究が進んでいない日本語教育における反転授業の有効性を検証し、反転授業学習モデルを構築することである。初中級から上級の全ての日本語クラスの文法学習において反転授業を実施し、学習成果分析(t検定、相関分析)、半構造化インタビュー調査(SCAT分析)、学習者特性分析(構造方程式モデル)を行った結果、反転授業未実施クラスよりも実施クラスの方が到達度テストにおいて有意に高く、また、SCAT分析、構造方程式モデル分析においても日本語学習者及び日本語教員は反転授業の効果・影響を認識し、新たな教育方法に順応していることが確認され、日本語教育において反転授業の実施効果があることが実証された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

反転授業は、近年日本語教育において普及し始めた新しい教育方法であり、今後ICT環境の整備、教材コンテンツの増加によりさらに普及が見込まれる分野である。本研究の成果は日本語教育及び外国語教育における反転授業の有効性、及びアクティブ・ラーニングの可能性を見極める際の重要な情報を提供するものであり、その教育的・学術的意義は大きいと考える。また、今後反転授業を行おうとする多様な教育・研究機関の環境整備を考える際や、実際に反転授業を導入した際に課題として出てくる実施・運営方法等の解決策を提示する貴重な資料としても広く貢献することが期待できると思われる。

研究成果の概要(英文)：This study aims to verify the effectiveness of flipped learning and build the flipped learning model for Japanese language education. We paired flipped learning with Japanese language instructions (pre intermediate to advanced classes), and analyzed Learning outcomes (e.g. correlation analysis, comparative analysis) Semi-structured interview surveys with SCAT analysis and Questionnaire surveys with structural equation model. The results revealed that there was statistical significance for each test respectively, which verified the effects of the flipped teaching method for grammar lessons using pre-made lesson videos. And through SCAT and SEM analysis, we also observed the Japanese language learners and teachers' view of learning changes when they realized that active learning induces them to improve their proficiency in Japanese. Therefore, it has been proven that there is a positive effect when using flipped learning in Japanese language education.

研究分野：日本語教育

キーワード：反転授業 予習講義動画 文法教育 eラーニング 学習支援システム

1. 研究開始当初の背景

本研究は、外国人留学生対象の日本語教育において反転授業を実施し、その効果検証を行い、反転授業学習モデルを構築するものである。現在、Bergman & Sams^[1]に代表される、新たな学習内容をビデオ講義で宿題としてオンラインで視聴させ、授業内で演習を中心に行う反転授業の取り組みが広まっており、日本においても宮城県富谷町立東向陽台小学校での取り組みを皮切りに、佐賀県武雄市の小学校や近畿大学付属高等学校をはじめ、多くの初中高等教育機関で導入され、その成果も報告されている。

反転 (Flipped/Flipping) という概念は Baker(2000)^[2]に初出を見、その後 Tenneson & McGlasson(2005)^[3]と Strayer(2007)^[4]が Flipping という語を用いて論述し、Salman Khan, Bergman & Sams^[1]らの取り組みの発表によって今日の広がりに至っている。Cockrum(2014)^[5]は、反転授業の発展段階は3段階あるとし、第1段階は traditional flip という収録したビデオ講義を事前に学習者にオンライン視聴させるだけのもので、第2段階では3つの様式があり、それらは①基礎的知識の完全習得を目指す Flip-Mastery と、②まず課題を与えて事象の探究をさせ、その後ビデオ講義を視聴させて、最後にさらに課題を与えて定着を図るという Explore-Flip-Apply、そして、③事前にビデオ視聴後、授業で課題を与え、学習者間で協同的に答えを導き出していくという Peer Instruction Flip があるとしている。さらに、第3段階では第1、2段階での経験を基に多様な反転授業のモデルを構築するという。また、山内他(2015:4)^[6]では反転授業の形態は大きく分けて2つあるとし、基本形となる知識の定着を目的とする「完全習得学習型」と実践的な専門知識・スキルの育成を目的とした「高次能力学習型」を提示している。これまでの反転授業の成果としては、第1、2段階における成果報告が多く、反転授業によって、落第率の減少、試験の得点の向上、効果と参加に関する学習者の認識の向上、授業外における学習時間の増加等の成果が報告されている。一方、外国語学習においては、スペイン語学習で参加型の活動を増やせた^[1]、英語学習において学習者の英語能力だけではなく、学習意欲改善にも効果があった^[7]という報告がある。また、Marshall and Decapua(2013)^[8]によると、従来のクラスでの英語学習者は Bloom's Taxonomy^[9]における下位レベル (understanding/remembering) に注力するに留まるが、反転授業では上位レベル (applying/analyzing/creating) に焦点をおいて活動できると主張している。

2. 研究の目的

上記のような事例から、外国語学習においても反転授業の効果が期待されつつあることは明らかである。しかしながら、日本語教育の分野においては、日本語教員養成クラスでの取り組みの報告はあるものの^[10]、日本語学習者を対象とした実践においては、筆者の識る限り古川・手塚(2015)^[11]のみであり、この論文も上級日本語学習者を対象にした文法教育における完全習得学習型の反転授業の成果報告であるため、初級から中級日本語学習者のクラスを対象とした調査報告は未だされていないのが現状である。そこで、本研究では、4技能(読む/聞く/書く/話す)の習得を目指す、初級から上級の日本語クラスを対象に完全習得学習型の反転授業を行い、日本語教育において反転授業のモデルが有効に機能するのか、効果検証を行い、最終的に日本語教育における反転授業学習モデルの構築に結びつける。

3. 研究の方法

3.1 反転授業の概要

本機関の「日本語科目」は、日本語能力に応じてレベル1から6(初級クラス～上級後半クラス)の6レベルに分けられており、1コマ90分の授業が1日3コマ(「総合(文法・語彙・漢字)」「読解(聴解・読解)」「文章口頭表現(会話・作文)」の3科目構成)で週5日開講されている。反転授業は、レベル2(初中級クラス)からレベル5(上級クラス)の「総合」の文法項目部分で行った。文法項目を反転授業にした理由としては、従来の授業方法では、教員が新出文法の導入に時間をかけており、既習文法との比較や、学習者の産出活動及び教員によるフィードバックにまで時間を割くことができなかったからである。このため、授業時間内では文法の意味を理解するに留まり、運用するに至らない学習者が多いことが大きな課題であった。そして、その課題を解決する方法として、反転授業を採用し、教員主導で行う文法導入の動画視聴を授業外課題とし、授業時間内では、学習項目の産出、教員によるフィードバック、学習者間の相互行為の機会を増やすことで、学習者の学習項目の定着及び運用能力の向上を図ることとした。

反転授業実践の流れとしては、まず学習者に本学の Learning Management System (学習支援システム: 以下 LMS) にアクセスし、アップロードされている①10分程度の講義動画(図1参照)の視聴、②確認問題(選択問題4問程度)と文完成問題(各文型2題×4文型)をすることを予習課題として課した。そして、授業では、③確認問題(②)の理解チェックから入り、④穴埋め問題等の練習問題、⑤予習課題として課した文完成問題(②)のフィードバックを行った。④及び⑤の練習問題の解答と文完成のフィードバック時は、学習者間のグループワークを中心に行い、教員によるフィードバックだけではなく、学習者間での誤りの指摘や修正などを行った。そして、授業後は、復習として LMS にアップロードされている eラーニング練習問題を課し、知識の定着を図った。以下の図2が反転授業実践の流れである。

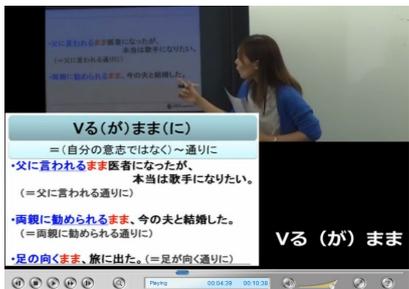


図1 講義動画の例

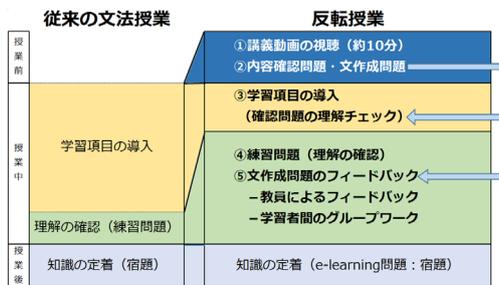


図2 反転授業実践モデル

3. 2 研究方法

本研究では主に以下の3つの質的・量的研究を行った

① 学習成果分析

学習成果分析では、反転授業の効果を測定するため、まず、どの程度の学習者が予習講義動画を見てきているのかに関する視聴ログ分析、次に、学期末における到達度テストにおいて予習動画視聴課題があるクラス（実験群）とないクラス（統制群：反転授業実践前のクラス）で差が見られるかどうかt検定を行った。そして、講義動画視聴率と日本語科目の到達度テスト結果に関係性が見られるかどうか、相関分析を行った。調査対象者の人数等の内訳は以下のとおりである。

表1 学習成果分析で対象とした日本語学習者の内訳

	期間	初中級	中級	中上級	上級
反転授業実施クラス	2016年4月～2018年1月	71	138	245	243
反転授業未実施クラス	2013年4月～2015年1月	31	123	160	70

② 半構造化インタビュー調査（SCAT分析）

半構造化インタビュー調査では、得られたデータをSCAT法（大谷2008^[12], 2011^[13]）を用いて分析、理論化することによって反転授業実施時における学習者の学習プロセス及び学習意識の変容過程、及び反転授業によって授業内での役割が大きく変わる日本語教師の反転授業に対する評価、教育の意識変容を明らかにした。

調査対象者は、日本語学習者に関しては、本機関に所属する初中級クラスから上級クラスの日本語学習者13名で、2016年8月及び12月、日本語教師に関しては、本機関日本語科目担当の教師3名で、2017年7月-9月に、それぞれ1回45分-60分程度で半構造化インタビューを行った。

インタビュー調査で得られたデータは、SCAT法に基づき、<1>データの中の着目すべき語句、<2>それを言いかえるためのデータ外の語句、<3>それを説明するための語句、<4>そこから浮き上がるテーマ・構成概念という順でコーディングを行い、その後、主に<4>を基にストーリーラインを記述し、理論記述、さらに追及すべき点・課題の記述を行った。

③ 学習者特性分析（構造方程式モデル）

学習者特性分析では、どのような学習者特性が反転授業の教育成果（講義動画視聴率及び到達度テストの得点）に影響を与えているのかを明らかにするため、反転授業実施後のアンケート結果を基に、「到達度テスト得点」「講義動画視聴率」「学習レベル」「インターネット使用時間」「PCの得意／不得意」「予習課題評価」「講義動画評価」「講義動画理解度」「講義動画時間」「e-learning評価」の13項目を測定変数とし、構造方程式モデルによる分析を行った。

調査対象者は本機関に所属する初中級クラスから上級クラスの日本語学習者でアンケート項目全てに回答した334名を対象とした。また、アンケート調査は「学習者個人の志向、学習状況・環境」、「予習講義動画に対する評価」、「反転授業（教育法）に対する評価」に関する10の質問を5件法で、2016年7月から2019年1月までの学期末に行った。

4. 研究成果

① 学習成果分析

まず、予習講義動画の視聴率に関して、図3はLMSへのアクセスログを基に、学習者全体の平均講義動画視聴率（以下視聴率）の推移を表したものであり、縦軸は視聴率（パーセンテージ）、横軸は授業回数を示している。視聴率の平均値は、それぞれ初中級クラスは67.3%、中級クラスは68.4%、中上級クラスは79.6%、上級クラスは74.2%、全体平均で72.4%であり、視聴率の推移は、概ね70%から80%の間で推移していることがわかる。平均して約2割の学習者が見ていない理由としては、インタビュー調査で、他科目の課題の多さによる疲労、毎日予習課題の動画を見なければならぬことによる動画視聴意欲の低下、そして、同じ時間にアク

セスが集中することによって生じるインターネット回線の問題が主な原因として挙げられた。

次に、反転授業未実践と実践の到達度テストにおいて有意差が見られるかどうか t 検定を行った。その結果、いずれのクラスにおいても未実践と実践の間に有意な差が確認された（初中級クラス： $t=2.283$, $df=100$, $p<.05$ 、中級クラス： $t=3.115$, $df=259$, $p<.01$ 、中上級クラス： $t=2.299$, $df=403$, $p<.05$ 、上級クラス： $t=2.870$, $df=99$, $p<.01$ ）。この結果と平均値から見ると、反転授業を実施しているクラスの方が学習者の得点が高いと解釈することができる。

最後に、学習者各個人の視聴率と到達度テストの関係を確認するため、相関分析を行った。その結果、各クラスともに中程度の相関が確認された初中級クラス： $r=.396$, $p<.01$ 、中級クラス： $r=.412$, $p<.01$ 、中上級クラス： $r=.438$, $p<.01$ 、上級クラス： $r=.466$, $p<.01$ ）。これらの結果から、学習者が講義動画の視聴によって、到達度テストで高得点を取得できたという因果関係を見出すことは難しいが、少なくとも講義動画を積極的に利用し、視聴率が高い学習者は、到達度テストにおいて高得点を取得していることがわかる。

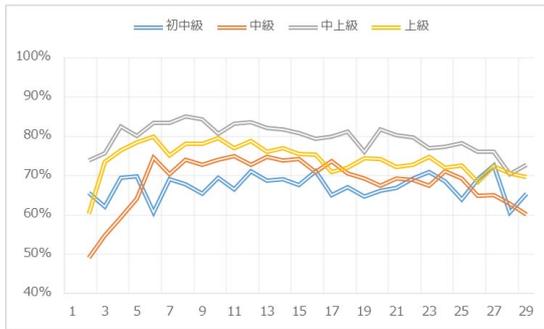


図3 予習動画視聴率の推移

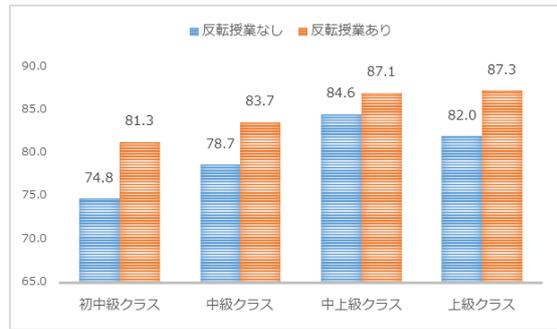


図4 反転授業実施前/後の到達度テストによる比較

② 半構造化インタビュー調査 (SCAT 分析)

13名の日本語学習者に反転授業実施後にインタビュー調査を行い、そこで得られたデータを SCAT 法によって分析した結果、学習者の反転授業に対する評価と学習意識の変容に関して、学習者に共通する構成概念として「教育方法の変化による戸惑い・拒否感」「反転授業の受容」「予習の重要性への気づき」「学習観の変化」の4つが抽出された。以下の表2は、13名の日本語学習者のインタビュー調査で抽出された構成概念を基に作成したストーリーライン、理論記述である。

表2 日本語学習者に関するストーリーライン、理論記述

ストーリーライン	学習者は反転授業に対して初めは <u>教育方法の変化による戸惑い</u> や、一部 <u>拒否感</u> に似たものがあるものの、徐々に能動的学習を中心とする <u>反転授業の授業形態を受容・効果を認識</u> し、質問を持って授業に参加できる、授業での理解が促進される等、 <u>予習の重要性に気づき</u> 、彼ら自身の中で、能動的な学習が自身の日本語能力を向上させるという <u>学習観の変化</u> が起こる。
理論記述	<ul style="list-style-type: none"> 反転授業の教育方法は、学習者にとって負担が大きい場合や、学習者が自身の学習方法との相違により戸惑いや拒否感を持つこともあり、慣れるまでに時間を要する。 質問を持って授業に参加できる、授業内で多くのフィードバックがもらえるなど、学習者は徐々に反転授業の利点に気づき、教育効果を認識する。 反転授業の教育方法の中で効果的に学習するためには、予習が重要であることを認識する。 反転授業を進めていく中で能動的な学習（自律学習）が確立していく。

上記のように、学習者個々の回答から抽出した共通する4つの構成概念を再文脈化し、ストーリーラインを作成することで、13名に共通する反転授業に対する評価と学習意識の変容についての説明ができる。全体として、反転授業開始当初は比較的否定的な評価だが、授業を受ける中で反転授業の良さを感じ、学習方法における気づきにつながっているというように時系列的に窺うことができた。また、理論記述を行った結果、今回のインタビューデータから、学習者が反転授業を受けることにより、どう変化するかという点において、以上の4点が挙げられた。反転授業は長期的に見れば、学習者にとって自律性が高められる効果的な教育方法であると言える。

次に、3名の日本語教師にインタビューした結果、共通する構成概念として「反転授業への関心」「ICT 機器の理解」「対面授業での理想と現実」「教室内の工夫とその見直し」「時間の制約による対面授業の限界」「カリキュラム全体を通して見た反転授業の効果」「講義動画及び予習の重要性の再認識」「反転授業への理解とその変化」、教師の役割については「サポート的な役割」という項目が抽出された。以下の表3は、3名の日本語教師のインタビュー調査で抽出された構成概念を基に作成したストーリーライン、理論記述である。

表3 日本語教師に関するストーリーライン、理論記述

ストーリーライン	3名の教師は、 <u>反転授業への関心の有無</u> 、 <u>ICT機器の理解</u> が深いかどうかで、反転授業の受け入れ方が異なった。反転授業の印象の良し悪しにかかわらず、皆授業内での困難を経験し、 <u>対面授業での理想と現実</u> を感じている。その中で、それぞれ <u>教室内の工夫とその見直し</u> を行い、 <u>時間の制約による対面授業の限界</u> を感じながらも、 <u>カリキュラム全体を通して見た反転授業の効果</u> を認めている。反転授業の中でも、 <u>講義動画及び予習の重要性の再認識</u> がされているのが大きい。反転授業に取り組み、現在に至るまで <u>試行錯誤</u> し、 <u>反転授業への理解とその変化</u> を示している。また、反転授業における教師は学習者の主体的な取り組みを見守り、 <u>サポート的な役割</u> を担っていると考えている。
理論記述	<ul style="list-style-type: none"> 反転授業の実践において抵抗感を最小限にするには、実践への興味や知識、ICT教育への理解が必要である。 反転授業を行う上で生じた、学習者主体による教室内活動の時間の制約、活動の限界があり、その中で工夫と自身の授業の内省を行っていくことで効果が出てくる。 反転授業を行うことにより、教師も改めて予習の大切さを感じ、学習者の予習による効果を授業で見ることができる。 実践開始以前の関心度にかかわらず、授業を試行錯誤しながら行っていくことで反転授業を理解し、授業への取り組み方や考え方に変化が起こる。 反転授業における教師は、学習者の主体的に学習を進めていく姿を見守り、サポートしながら、向かうべき方向に導いていく役割を担う。

3名の教師のインタビューから、反転授業実践の際には、事前知識として反転授業がどういうものであるかという認識及び理解があるか否かが、抵抗なく反転授業に入れるかどうかに影響することが窺える。それには、学習者だけでなく、教師へのオリエンテーションを十分に行わなければならないだろう。さらに、チームティーチングで行う場合は、教室内活動をどのようにしていくべきか具体的に活動内容の検討と実施案を立てておいたほうが良いことも分かった。本機関では、教室内活動はある程度進め方の指示をして自由度を持たせたが、教師間のブリーフの違いからクラス運営の上で問題が生じることからも、これまでとは異なる授業形態である反転授業では特に教師間でコミュニケーションを取りながら、対面授業の方法を探っていくことが必要であると考えられる。一方で、予習動画をはじめとする予習の効果は教師も授業の中で感じており、その効果を発揮させるには学習者に予習の重要性を認識させなければならない。また、時間の制約がある対面授業において学習者のインタラクションが増えることにより、従来の授業よりもより学習者の反応を見ることに注意を向けたり、発話を促すような指導に意識を向けたりするようになったという変化が見られた。さらに、これまでとは異なる授業法を実践することにより、試行錯誤をしながら自身の教授法について意識を高めることが可能になるのではないかと考えられる。

③ 学習者特性分析 (構造方程式モデル)

学習者特性の影響要因を構造方程式モデルを用いて分析した結果、「講義動画理解度/講義動画時間/e-Learning 評価」が「講義動画評価」に、「講義動画評価」が「予習課題評価」に影響を与え、また、「PCの得意/不得意」が「インターネット使用時間」に影響を与えていることがわかった。そして、「講義動画視聴率」は上記の「予習課題評価/学習レベル/インターネット使用時間」が直接的な影響要因となっており、その「講義動画視聴率」が「到達度テスト得点」に影響を及ぼしていることがわかった。なお、最終的なモデルの適合度は χ^2 二乗=47.561、 $df=32$ 、 $p=.038$ 、 $RMSEA=.045$ 、 $CFI=.967$ 、 $AGFI=.933$ 、 $GFI=.961$ であった。

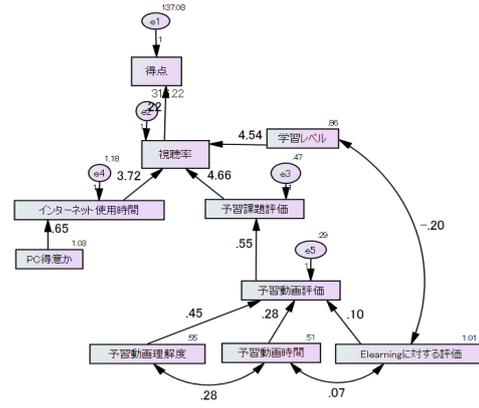


図5 構造方程式モデルの結果

反転授業を有機的に機能させるため、以上の結果から示唆されることとしては、まず、予習動画/課題の評価は予習動画評価に影響を与えており、動画の時間、内容の検討・質を高める必要があること、e-learning に対する受容性が予習動画評価に影響を与えていることから、学習者の学習方法に関する意識改革、あるいは情意面の積極的なサポートが必要であること、そして、予習課題の評価が動画視聴率に影響していることから、課題内容の検討、対面授業との関連性をいかに作るかが重要であることがわかった。また、PCの得意不得意、インターネットの使用時間が視聴率に影響していることから、インターネットへのアクセスが少ない学習者のフォローが必要であることも明らかになった。

【引用文献】

[1] Bergmann, J., Sams, A. (2012). Flip Your Classroom: Reach Every Student in Every Class Every Day. International Society for Technology in Education.

- [2] Baker, J. W. (2000). The “classroom flip”: Using web course management tools to become a guide by the side. The 11th international conference on college teaching and learning. Jacksonville, FL.
- [3] Tenneson, M., McGlasson, R. (2005). The Classroom Flip: presentation on using technology in blended classrooms to free up more class time for active discussion. Missouri Teaching and Learning Mentoring Project Best Practices Conference. Springfield, MO.
- [4] Strayer, J. (2007). The effects of the classroom flip on the learning environment: a comparison of learning activity in a traditional classroom and a flip classroom that used an intelligent tutoring system (Unpublished doctoral dissertation). Ohio State University. URL: <http://faculty.washington.edu/rvanderp/DLData/FlippingClassDis.pdf> (2019/5/20 閲覧)
- [5] Cockrum, T. (2014). Flipping Your English Class to Reach All Learners: Strategies and Lesson Plans. New York: Routledge.
- [6] 山内祐平, 大浦弘樹, 安斎勇樹, 伏木田稚子 (2015) 「序文」『反転学習』オデッセイコミュニケーションズ
- [7] Hsiu Ting Hung (2015). Flipping the classroom for English language learners to foster active learning. Computer Assisted Language Learning, 28(1), 81-96.
- [8] Marshall, H.W., & DeCapua, A. (2013). Making the transition to classroom success: Culturally responsive teaching for struggling language learners. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- [9] Anderson, L. W. & Krathwohl, D. R. (2001). A taxonomy for learning, teaching, and assessing. New York: Longman.
- [10] 篠崎大司 (2014) 「日本語教員養成のための反転授業の実践と学習者評価:『言語一般』から『言語と教育』まで」『日本語教育方法研究会誌』21(2), 34-35.
- [11] 古川智樹, 手塚まゆ子 (2015) 「日本語教育における反転授業の実践—文法教育における試みと課題—」『第 17 回 (2014 年度)日本 e-Learning 学会学術講演会論文集』25-33.
- [12] 大谷尚 (2008) 「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案:着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』54(2), pp.27-44.
- [13] 大谷尚 (2011) 「SCAT: Steps for Coding and Theorization: 明示の手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的分析手法」『感性工学』10(3), pp.155-160.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 (計 2 件)

1. 古川智樹, 手塚まゆ子 (2018) 「反転授業に対する日本語学習者の評価と学習意識の変容—SCAT による質的分析を通して—」『ヨーロッパ日本語教育』22, pp.465-472. 査読有
2. 古川智樹, 手塚まゆ子 (2016) 「日本語教育における反転授業実践—上級学習者対象の文法教育において—」『日本語教育』164: pp.126-141. 査読有

〔学会発表〕 (計 8 件)

1. 手塚まゆ子 (2019.3.23) 「反転授業の導入による対面授業の変化」『第 52 回日本語教育方法研究会』 於: 杏林大学 査読有: 口頭発表
2. 古川智樹, 手塚まゆ子 (2018.8.4) 「日本語教育における学習者特性が学習成果と反転授業評価に及ぼす影響—構造方程式モデルを用いて—」『2018 年日本語教育国際研究大会』 於: イタリア、ヴェネツィア カ・フォスカリ大学 査読有: 口頭発表
3. 手塚まゆ子, 古川智樹 (2017.11.26) 「反転授業に対する教師の評価と意識の変容」『2017 年度日本語教育学会秋季大会』日本語教育学会 於: 朱鷺メッセ (新潟県新潟市) 査読有: 口頭発表
4. 古川智樹, 手塚まゆ子 (2017.9.2) “Evaluation of the flipped classroom by Japanese language learners and the change in their perception of learning: A qualitative analysis by the SCAT method” 『15th EAJS International Conference』 pp.60. European Association for Japanese Studies (EAJS) 於: リスボン新大学 (ポルトガル) 査読有: 口頭発表
5. 古川智樹 (2016.10.23) 「日文教育的翻转课堂—実施の効果と問題—」『2016 年度福建省首届现阶段, 日语应用型人才培养模式“论坛”』 於: 閩江学院 (中国福建省) 査読無: 招待講演
6. 古川智樹, 手塚まゆ子, 末吉朋美, 武井真美, 藤田智彦, 増井奈穂美 (2016.10.9) 「文法教育における反転授業の効果検証—中級から上級日本語学習者を中心に—」『2016 年度日本語教育学会秋季大会』 pp.229-230. 於: ひめぎんホール (愛媛) 査読有: ポスター発表
7. 手塚まゆ子, 古川智樹 (2016.9.10) 「文法授業における反転授業の評価—ARCS 動機づけモデルの観点から—」『International Conference on Japanese Language Education 2016』 CD-R 於: バリ (インドネシア) 査読有: 口頭発表
8. 古川智樹, 池田佳子, 小川洋介, 北野朋子, 手塚まゆ子 (2016.8.27) 「留学生向け反転型日本語授業のカリキュラム設計」『留学生教育学会 第 21 回年次大会』留学生教育学会 於: 大阪大学中之島センター 査読有: 口頭発表

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 手塚まゆ子

ローマ字氏名: TEZUKA, Mayuko

所属研究機関名: 関西大学

部局名: 国際教育センター

職名: 留学生別科特任常勤講師

研究者番号 (8 桁): 90734260